



✧ 研究会報告 ✧

シンポジウム開催報告

「首里城と沖縄神社 —資料に見る近代の変遷—」

日時：2024 年 9 月 14 日（土）

開始 13：45（開場 13：30）～終了 16：30

開催方式：対面のみ（オンライン配信なし）

会場：那覇市職員厚生会厚生会館

（那覇市おもろまち 1-1-2 上下水道局庁舎 B 棟 3 階）

定員：100 名収容

事前申し込み：先着順

主催：琉球館、首里城再興研究会

共催：神奈川大学非文字資料研究センター

趣旨：近代を中心とした首里城と沖縄神社に関する写真・図版、文字資料などを収録した神奈川大学非文字資料研究叢書『首里城と沖縄神社—資料に見る近代の変遷』（近現代資料刊行会、2024 年）の刊行を機に、同書にかかわった編著者と地元沖縄で首里城問題にかかわっている歴史家を交えて、具体的な資料から近代における首里城と沖縄神社の関係について議論する。

プログラム（敬称略）

総合司会：友知政樹（沖縄国際大学 教授）

コーディネーター：後田多敦（神奈川大学非文字資料研究センター 研究員）

パネリスト：加藤里織（神奈川大学非文字資料研究センター 客員研究員）

前田孝和（神奈川大学非文字資料研究センター 客員研究員）

伊良波賢弥（神奈川大学非文字資料研究センター 研究協力者）

田場裕規（沖縄国際大学 教授）

伊佐真一（首里城再興研究会、琉球近現代史家）

《開会》13：45

開会挨拶と登壇者紹介 司会：友知政樹

『首里城と沖縄神社』書籍紹介：後田多敦

各報告（15 分ずつ）

伊良波賢弥「近代における首里城の建物利用の変遷」

加藤里織「『首里城と沖縄神社—資料に見る近代の変遷』収録資料から」

前田孝和「沖縄神社概史と首里城」

休憩 10 分

コメントなど

田場裕規

伊佐真一

質疑応答

まとめ：後田多敦

《閉会》

閉会挨拶：友知政樹

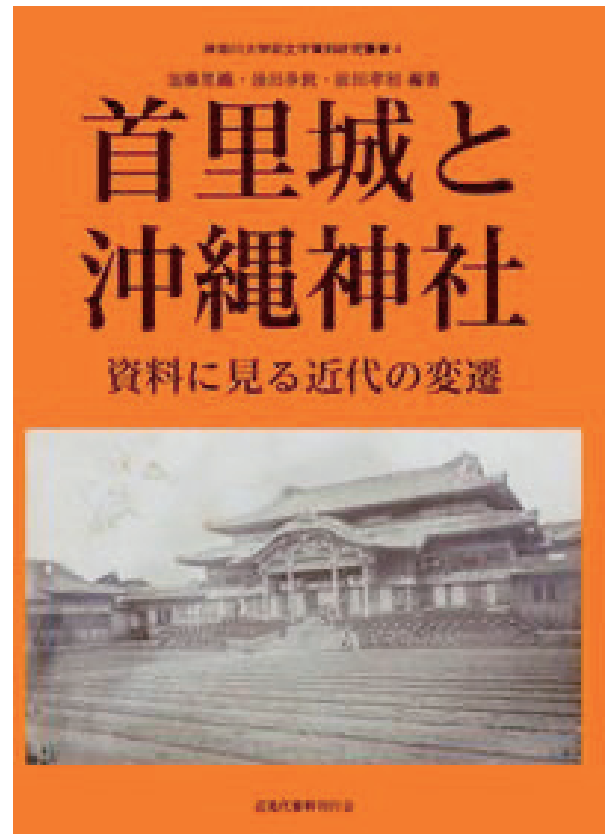
加藤 里織（非文字資料研究センター 客員研究員）

開催報告

2024年9月14日、那覇市職員厚生会厚生会館でシンポジウム「首里城と沖縄神社―資料に見る近代の変遷」が開催された。本シンポジウムは、神奈川大学非文字資料研究叢書4『首里城と沖縄神社―資料に見る近代の変遷』の刊行を機に企画されたものである。シンポジウム前日までの天気予報では、台風が沖縄本島を直撃する予報が出ていたため、当日朝には晴れ間がのぞいていたものの、天候に不安がある中で80名を超える参加者が集まった。

シンポジウムでは、開会挨拶と登壇者紹介を司会の友知政樹氏が行ったあと、『首里城と沖縄神社』の編著者である後田多敦氏から、趣旨説明と本の紹介が行われた。本書については、「近年、首里城に関する話題として大龍柱の向きを巡る議論がある。この議論の中で様々な資料が“つまみ食い”されてきた。そこで、資料をまとめてみよう」と本書を編むことになった。また、沖縄神社に関する資料も可能な限り収録したが、“神社があった”ことがわかるようになっている資料集としては、沖縄で初めて、日本でも初めてのものとなった。」と紹介した。続いて、「(コメンテーターの) 田場裕規氏の『火難の首里城』^{注1}」が刊行されたこともあり、合わせて首里城を考えてみる機会にしたい」という趣旨についての説明もあった。大龍柱を含む首里城そして沖縄神社については、本シンポジウムの報告者、主催者、会場の参加者はそれぞれの立場があり、議論が噛み合わないこともある。しかし「同じ土俵に立ち議論することが重要である。たとえ意見が違っても同じ資料をベースに議論をすることが必要であり、その議論を始めるための資料集が本書なのである」と本シンポジウムの目的と本書の意義について強調した。さらに「(これまで) 歴史資料は文字資料を優先してきたが、文字資料には限界がある。書かれているものは時として間違ったことも書かれるが、人間の痕跡は嘘をつかない。この人間の痕跡から歴史を考えてみようということで、文字以外の人間の痕跡の資料を大事にしたいということが非文字資料研究のベースにある。その中で、特に写真などを用いて分析を試みるもの」と、収録した非文字資料についての説明も付け加えた。

開催趣旨説明のあと、本書にかかわった編著者3名が各15分ほどの報告を行った。まず、本書の年表作成を担当した伊良波賢弥氏は「近代における首里城の建物利用の変遷」というテーマで、最初に「1. 首里城内各所の名称(一部)」として首里城内各所の名称について、現在の名称と首里での呼称、その発音についても紹介した。続けて、「2. 軍隊の駐屯から学校の設置へ」「3. 建物の劣化・倒壊」「4. 建物の解体」「5. 沖縄神社の創建」「6. 公会堂・博物館・城内食堂」と、1879(光緒5、明治12)年の熊本鎮台沖縄分遣隊の駐屯から沖縄県立師範学校附属小学校などの学校施設や沖縄神社として利用されていたほか、沖縄県教育会附設郷土博物館



『首里城と沖縄神社』書影

<<<シンポジウム>>>

首里城と沖縄神社

— 資料に見る近代の変遷 —

シンポジウム報告者

近代(を中心とした)首里城と沖縄神社に関する写真・図画・文字資料などを収録した神奈川大学非文字資料研究叢書『首里城と沖縄神社―資料に見る近代の変遷』(近現代資料目録)の出版を機に、本書が中核的な編著者である後田多敦氏(本書の編著者)を中心に、関係者から寄せられた資料を、本書の資料集として収録した。

上は琉球国時代の首里城(ルヴエルトが「琉球諸島紀行」の図説より)、初は沖縄神社奉祀(拝殿とされた「道徳」の後方に立てられていた)。

総合司会：友知政樹(沖縄国際大学教授)
 コーディネーター：後田多敦(神奈川大学非文字資料研究センター研究員)
 パネリスト：加藤里織(神奈川大学非文字資料研究センター客員研究員)、前田孝和(神奈川大学非文字資料研究センター客員研究員)、伊良波賢弥(神奈川大学非文字資料研究センター研究協力者)、田場裕規(沖縄国際大学教授)、伊佐眞一(首里城西側研究会、琉球近現代史家)

日時：2024年9月14日(土) 開場：13:30 開始：13:45 終了：16:30
 会場：那覇市職員厚生会厚生会館 《資料代：500円》 先着順
 (上下水道局庁舎B棟3階・那覇市おもろまち1-1-2)

◇主催：琉球館、首里城西側研究会 共催：神奈川大学非文字資料研究センター
 ◇問い合わせ先：電話 098-943-8945 琉球館(098-943-8945)

「首里城と沖縄神社」シンポジウム案内



の別館や、さらには食堂など様々な施設として利用されていたことを四つの項目に分けて報告した。

続いて加藤里織は、『『首里城と沖縄神社—資料に見る近代の変遷—』収録資料から』と題して、「第1章 写真」「第2章 尚家資料」「第3章 その他関連資料」「第4章 図版・地図」各章に収録した資料について説明した。また、収録した資料の代表的な収蔵先について、収録資料数の多い順（那覇市歴史博物館、沖縄県立図書館、沖縄県公文書館、熊本県立図書館、沖縄県立博物館・美術館、一般社団法人沖縄美ら島財団、沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館）に、資料の収蔵状況や利用方法などを報告した。

前田孝和氏は、「沖縄神社概史と首里城」と題して、まず戦前における「神社」についての“前提”を示したあと、「1、沖縄神社の創立・昇格（首里城）・再建（弁ヶ嶽）」「2、琉球藩・沖縄県に官国弊社・県社の声」「3、沖縄神社創建案」「4、沖縄神社創立の目的・流れ」「5、首里城の沖縄神社拝殿への転用（拝殿工事・首里城取壊中止、拝殿転用の激変）」「6、沖縄神社の祭祀・施設・神職」「7、沖縄の公認神社」「8、戦時中の神体の行方、社殿消失」「9、戦後の宗教法人沖縄神社」「10、沖縄といわゆる「国家神道」、そして最後に「11、総括～沖縄神社とは何だったのか、そして何なのか」という小括を設けて報告した。

各報告のあと、田場裕規氏から「琉球国の政策というもの、諮問・詮議・答申をもって決定されるとされるが、大龍柱の向きについてこれらがされてきたのか。また、鳥越はなぜ、どうして琉球の神々を研究したのか、なぜ沖縄神社の祭神はあの五柱なのか、それは植民地における神の祀り方なのかなどが気になる」というコメントがあった。

伊佐眞一氏からは「タイトルは首里城と沖縄神社という非常に穏やかなタイトル、しかし中身はすごいストレート。首里城と沖縄神社というのは、言い換えれば、〈琉球—沖縄と日本〉と言っている。その象徴としての首里城、沖縄神社ということをやっているのだと思った。」と、沖縄側からどのように考えるかという点についてコメントがあった。

続いて会場から質疑を求めた。最初の質問者から各報告とコメントについて、沖縄県祖国復帰 50 周年イベントに尚家子孫の尚衛氏が登壇した際の記事（『沖縄タイムス』2022 年 5 月 15 日付）を引用しながら（尚泰王は）琉球が存続するためには日本に帰属するのが正しい道だと決断された」こと、また、今後の沖縄の発展には琉球・沖縄の歴史文化の正しい継承が必要であるため、「琉球文化や沖縄方言を学ぶことで日本との対立をおおるような動きを時々見るが、それは私たち（尚衛氏）の願いとは対極にあり、悲しい」と述べていたことが取り上げられ、首里城正殿が沖縄神社拝殿へとされたことを「日本（国家）に押し付けられたというのは、ちょっと

違うと思う、（シンポジウムは）良い学びだったが、一部の発言は尚泰王の意思、琉球・沖縄の人たちとは多分違うのではないかと、日本と沖縄の対立をおおるような講演になりかけていたことが残念だ」という感想が出された。これに対し、後田多氏からは「尚泰が国を差し出し琉球国が滅んだ際に、津嘉山朝功が“假令君ノ命ナレハトテ国家ノ為メニハ従ハサル事モアルモノナリ”（国を“売った”、譲った王様の言うことに従う必要はない）」と述べたこと、また、尚裕氏（琉球国王尚泰の曾孫であり、第二尚氏の第 22 代当主）が那覇市に尚家史料を寄贈した際に、尚家の何代目当主という言い方は自分の代で終わりにしてほしいと言いつつ残したことが紹介された。

質疑応答ではほかに、沖縄の神社の神職を誰が担ったのか、国家神道との関わり、祭神になぜ第一尚氏が入っていないのか、大龍柱の向きなどの質問があった。これらの質疑のうち、なぜ第一尚氏が祭神に入らなかったかについて、前田氏からは「（なぜかは不明だが）沖縄の歴史を考え、国の許可を得ることも考え、それにふさわしい神々を決めて申請して、最終的に五柱になったのだろう」というコメントがあった。また、後田多氏からは「琉球国時代は国廟（崇元寺）に舜天からの歴代王の位牌があった。そこに（沖縄神社祭神の一つである）為朝は入っていない。そのようなこともあり、何を祭神にするのかと考えられたのではないかと。琉球の国を差し上げた尚泰は入れるというの、（日本へ）巻き込みやすいという理由から、仕掛けとしてあったのではないかと。戦前のもので、戦争で失われたものを考えてみると少し風景がみえてくるのではないだろうか」というコメントが出された。会場からの質疑・感想の多くは大龍柱の向きに関するものであったが、ほかの質問も含めてこれらの疑問の多くは、本書を読んでもいただければわかることが多いと思う。そのような意味でも、本書が首里城と沖縄神社を考える上での基本書になっているという手応えを感じる質疑応答であり、会場から発せられる活発な発言には、首里城や沖縄神社に対する関心の高さがうかがえた。田場氏はこの大龍柱について、「単純にどちらを向くかという議論で終わらせてはいけない」とまとめた。

最後にシンポジウムの総括として、後田多氏が「同じ土俵に立つ、資料をベースに議論ができることを目的に行ったが、その目的は達成できたと思うので、次のステップに行けるのではないかと述べた。また、最初の質疑応答への補足として、尚泰王は琉球のため沖縄にたくさんのお金銭的支援をしていたことを紹介し、「（物事を）単純化せず歴史を立体的に見ていくことは必要であり、そのために尚家の資料をきちんと読み込んでいくことが重要だ」と述べ、締めくくった。

「首里城と沖縄神社」というテーマのシンポジウムを沖縄で開催できたということで、活発で熱気があふれる議論となり、非常に意義のあるシンポジウムとなった。

その様子はメディアでも確認することができる。『首里城と沖縄神社』本書やシンポジウム、それに大龍柱の向きなど関連する事項を巡っては、シンポジウム前には中外日報（8月30日、9月2日付）、毎日新聞（9月12日付夕刊）、沖縄タイムス（9月10日付）各社がそれぞれ記事を掲載してくれていた。それもあって沖縄での関心もより高まっていたと思う。シンポジウム後には、琉球新報（9月15日、同月20日付）、沖縄タイムス（10月3日付）で開催の様子を伝えてくれたほか、沖縄タイムス（10月5日付）には崎浜靖氏（沖縄国際大学教授）による本書書評が、琉球新報（10月27日付）には新城栄徳氏による本書書評がそれぞれ掲載された。

繰り返しになるが、沖縄の人々にとっての最大の関心は大龍柱ということもあり、シンポジウムでの話題の中心も大龍柱の向きに関するものであった。沖縄神社自体に関する議論は、これから本格的になっていくだろう。

後田多氏が最初の挨拶で述べたように、本書が同じ資料をベースに議論をするための資料集となり、ここから議論が活発になっていくことを願っている。そのために、今度は沖縄から日本に議論の場を移す必要があるだろう。海外神社班を主催とする首里城と沖縄神社についての公開研究会の開催や、さらには、『首里城と沖縄神社』の論考編刊行を目指すなど、引き続き精力的な研究活動を行っていききたいと思う。

最後に、本シンポジウムの開催にあたり、研究活動というものがいかに多くの方々の支えにより成り立っているかということを改めて実感した次第である。人的・金銭的な支援がなければ、このような活発な議論の場を設けることは叶わなかったであろう。シンポジウムの参加者、ほか登壇者、そして主催の琉球館、首里城再興研究会、共催していただいた非文字資料研究センター各位に対し、心より感謝の意を表したい。



修復工事中の首里城正殿



台風対策を施された修復工事中の正殿

【注】

注1 符俣恵一・田場裕規 『火難の首里城 大龍柱と琉球伝統文化の継承』 インパクト出版会、2024